



ERのクリニカルパール 160の箴言集 岩田充永 著

●B6 頁176 2018年11月
定価：本体2,800円＋税
[ISBN978-4-260-03678-8]医学書院刊

「ER診療に一片の悔いなし」、稀勢の里、いやラオウのようなコメントはとても私にはできない。もう少しきちんと病歴を聞けばよかった、バイタルサインの異変になぜ気付かなかったんだ、検査の前にやるべきことがあった、理解しやすいように病状説明するべきだった、などなど、いくつも反省すべき点がある。

ERは、限られた時間で緊急性の高い疾患や重症度の高い疾患を診る必要があり、診断エラーに陥りやすい場である。また、忙しくなると、夜間であると、自分自身のコンディションがよくないと、そのリスクはさらに上昇する。

自身が陥りやすいエラーを把握しておく、未然に防ぐことができる。この本には誰もが陥りやすいことがちりばめられている。岩田充永先生に自身の臨床現場を見透かされているような感覚をも持つ。先人の教えが重要であることは誰もが理解しながらも、その教えを受ける術がなければどうしようもない。また、だんだんと現場の上司の教えというのは煙たくなるものであれば間接的に、かつ端的に教えてほしい(ずうずうしい?!).

最新のエビデンスへは簡単に手が届くようになった。スマートフォン1つで論文検索、さらにはSNSやブログなどから有用な情報も入手可能だ。しかし、エビデンスは知っていても、それを目の前の患者さんに利用できるかをあらためて考えることを忘れてはいけない。

さらに、エビデンスを利用する前にやるべきことはきちんとやる必要がある。例えば、脳梗塞の患者であれば、血栓溶解療法や回収療法などの適応がないかを考え、迅速に身体所見をとり、画像をオーダーするわけだが、そもそも脳梗塞ではなく大動脈解離であったら、低血糖であったら、これらの治療のエビデンスは当然ながら利用できない(Cf.パール39, 61)。言われれば当たり前だ。しかしこのようなそもそもの話をしつこく教えてくれる人は、意外と少ないものである。

正しいことを伝えても、受け入れられないこともある。コンサルテーションをしても理想どおりにはいかないことも珍しくない。そんな時、相手を責める前に、その原因が自分にないかを自問自答することが必要だ。日々の自身の言動を見直す機会をとらえるのだ。あ、これも本書のパールとして含まれている(Cf.パール4)。やっぱり何でも書いてある(笑)。

ER診療の大原則ABCD、そして平常心欠如のサインABCDを頭に入れ、欠如サインが出た場合には本書に目を通し、その怒りを静め、気を取り直して現場に戻ろう。そうすれば、エラーすることなく適切な対応ができるだろう。本書はポケットサイズでスクラブや白衣のポケットに入る。ちょこっと取り出して岩田語録に目を通せば、気が静まる6秒などあっという間に経過してしまう。ABCDがわからないって？ 続きは本書で……。